
ワンダフル！

柳雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワンダフル！

【Nコード】

N4027T

【作者名】

柳雨

【あらすじ】

あなたは犬は好きですか？もし犬を飼ってるのならばあなたは自分の犬にしつけはしてますか？そして如何なることがあるうとも最後まで信じてあげられますか？これはとある家族と犬との愛と絆のおはなし…

（前書き）

初、オリジナル小説：まだそっちの方面に関しては右も左も解らない、今も小説書きとしてはまだまだ素人な私が書いたため内容の出来はあまり期待しないで気軽に楽しんでください（汗）

—皆さんは自分のペットにキチンとしたしつけが出来てますか？
して信頼が持てますか？

—とある一般家庭・深山家

—深山家の人達は平凡ながらも平和な日々を送ってたが、ある日突然…その事件は起きた。

「すみません…私、お隣りの大空という者ですが、深山さんですよ
ね？」

「へ？はい、そっすけど…ええと…大空、さん？ウチに何か…？」

—深山家のお隣りさんと名乗る少女・大空カケル（おおぞら・カケル）が突然訪問してきた、この日は生憎と他の家族全員が不在のために深山家の次男坊・深山鰐眼みやま・ツバメが彼女に應對する。

「この子…何かに似てると思いませんか？」

「キャンキャン！」

「あれ…？なくんか、どっかで…え…？」

—カケルは自分が抱いている黒っぽい可愛らしい子犬をツバメに見せた瞬間、徐々に彼の全身の血の気が引き、顔が青ざめていく…。

「ちょ…あれ？え、ま…待って…な、なんで？どうなってんスカ？」

「この子はアンナの…ああ、アンナというのは私の飼い犬の名前なんです、先月生まれたばかりなんです、ちなみに名前はモーラです。」

「キュウ〜ン？」

一身体がガクガクと震えだすツバメ、対照的にカケルは淡々と子犬・モーラの出生について話し出す。

「…おかしいですよ、私の家にはメスのアンナしか飼っていないのに、どうして子供が生まれるんでしょうね…？」

一カケルは段々ハイライトの入ってない眼になり、声のトーンを下げながらツバメに対して何か遠回しな問い掛けのようなことを言い出した。

一古来より、人のみならず動物が子を産むために…男と女、オスとメス、雌雄共に存在し、交尾を交わさねばならない…しなければ子供はほぼ生まれえないハズ、ならこの質問の答えはおのずと決まっている。

「ま、まさか…！？」

一ツバメは慌てた様子で家の庭から自分の飼い犬を連れて来て、モーラと飼い犬を交互に見る…お互いに黒い毛並み、しかも顔がほぼ似てる。

「…ね？お宅のワンちゃんにそっくりですよね？で・す・よ・ね？」

「…半蔵オオオオ！！ちょ、おま…何さらしてくれとんじゃあああああああ！！？」

「…へッ…。」

一カケルのトドメの一言と深山家の飼い犬・半蔵と大空家の子犬・モーラがそっくりなこと…ああ、間違いない、二匹は真正正銘の『父子』（？）のようだ…。

一どうやらカケルは半蔵がモーラの母犬・アンナを『孕ませた』と言いたいらしく、こうして抗議に来たらしい…。

「こうなったのもお宅のワンちゃんのせいです…この子を、モーラを引き取ってください。」

「…ざけんなッ！！さっきから聞いてりゃ好き放題言いやがって！そんなのタダの推測だろ！？ウチの半蔵がやったって証拠あんのかよ！？」

一カケルは父犬の責任としてモーラを引き取るように告げるが、自分の飼い犬にあらぬ疑いをかけられて憤りを感じたツバメは遂に激怒…証拠が無いから関係無いと言い張る。

「ですが…この近所には黒いワンちゃんは半蔵くんくらいしかいないらしくて…。」

「そんなもん、たまたまだろ！いいぜ、そこまで言うなら…オレが半蔵の無実を証明してやる！！」

一カケルの抗議など最早耳に入らず、ツバメはビシッ！と指を指しながら半蔵が疑いを孕ます…ではなく、晴らしてみせると宣言した。

「仮に証明出来なかったらそのモーラって子は引き取ってやるし、お望みとあらば半蔵を保健所に連れていったって良いんだぜ!？」

「…ッ…!? ギャインギャイン!!」

「いいでしょう。」

一…前者はともかく後者はいかなものかと? 半蔵が吠えながら、もし彼が人語が話せたならば『やめろ、テメエ! ブツ殺すぞッ!!』と言わんばかりの勢いで抗議してるが気にしてはならない…カケルはその約束をしかと聞き入れた。

「…た・だ・し♪オレが証明出来たら、そうだな…オレの言うことでも聞いてもらおうか! 例えば水着姿で街中出て買い物するとか? ケケケケ…。」

「…なッ!? み、水ッ…水着で…!? / /」

一自分だけ条件付きでは不公平なため、ツバメは半蔵の無実が証明出来たらカケルに自分の言うことをなんでも聞く様に要求…例え話とはいえ、年頃の少女が水着姿で街中を歩きながらお買い物だなんて、それじゃあ単なる痴女ではないか、カケルはそんなイメージを想像しただけで真っ赤になる。

「い、いいですよ!! / / 水着どころか全裸でもいいですよ!!」

「言ったな！？良いんだな！！約束だかな！？」

一半ばやケ気味ながらもカケルはツバメが出したその欲望にまみれた条件を飲んだ…こうして二人の飼い主達による熾烈な戦いが幕を開けた。

一次の日。

「…で、オレも付き合わなきゃならないわけか？半蔵の尾行に。」

「はあ…全く、なんでこーなるんだか？」

「協力頼むよ！兄ちゃんに姉ちゃん！！マジでウチの家族の冤罪を晴らしたいんだよ！！！」

「わかった！わかった！落ち着かんか！！馬鹿者ッ！！」

「ま、可愛い愛犬と弟のためだからね♪」

一複雑そうな表情を浮かべる深山家の長男・深山統刃^{みやま・トウハ}、長女・深山刃月^{ハツキ}は半蔵の冤罪(?)を晴らしたいと必死に頼み込むツバメに根負けして渋々承諾した(ちなみに刃月は結構ノリノリだった。)

一三人はサングラスに黒いロングコートという超怪しい張り込みスタイルになり、深山家の愛犬・半蔵くん的一天を陰ながら見守ることにした…。

一半蔵が大空家のアンナに会いに行つて然るべき行為に至らなければ

ばいいし、半蔵の他に黒犬が居れば証明も出来るだろうと踏んだからだ。

「クーン、クーン。」

「おやおや、ワンちゃんこんにちは。」

一午前10時…ご近所の島田さん家のババアにしばらくじゃれついでる。

一その30分後、午前10時30分…。

「あ！見て見て！！あの黒いワンちゃん、可愛い〜♪」

「ほら、おいでおいで〜♪」

「ガウ。」

一女子高前にて、二人組の女子高生に声を掛けられて近寄る半蔵、頭を撫でられる。

「…あいつ、案外モテるのな…。」

「クソッ！うらやましい…！！」

「はいはい、妬かない妬かない♪」

一飼い犬の意外な一面に感心する統刃、ツバメは歯ぎしりしながら羨み、刃月がそれにフォローを入れた。

「さて、その後…時間は飛んで午後12時になった。

「よう、半蔵！いつものちゃんとあるからな、ほらよ！」

「ギャウツ！！」

「はは♪そんなに美味しいか？腹減ったらまた来いよ！」

「商店街の精肉店『相模屋』の若旦那に声を掛けられてデカイ牛骨を貰う、どうやらこれが半蔵の昼食らしい上に毎回来てる節もあるようだ。

「…最近、餌を食わんと思ったらアイツ、こんなところで骨食ってたのか…。」

「後で若旦那にゃ御礼言わないとな。」

「半蔵の知名度って意外と高いんだね。」

「あんパンに牛乳と張り込みの常識飯を食いながら怪しさ爆発な格好の三馬鹿兄弟は改めて半蔵が如何に近所の人々に親しまれてるかを知った。

「その後、半蔵はあちこちで名前を呼ばれ、声を掛けられてじゃれついたり、欠伸しながらお昼寝したりと、意外と地味、且つ、ノンビリした日課をこなしていた。

「ふむ、今のところなんの問題も無いな…。」

「ふう…取り越し苦労だったかな？やっぱ…。」

「…と、思われたが…。」

午後14時30分。

「あら？半蔵♪また来てくれたのね？嬉しい！！」

「ハッ…ハッ…。」

（おお？今回はまた一段と大胆なスキンシップだな…？）

（あれ、近所一美人と評判の遠野さんじゃねーかッ！？畜生！半蔵、オレと代わりやがれ！！）

（ワーオ！半蔵ってば、やっるゝ♪キャハ♪）

「近所一美人と評判の女性・遠野遥に抱き着かれる半蔵…尚、ツバメが鼻息荒くしてスケベ心丸出しで興奮してたが気にしてはならない。」

「ふふ♪それじゃあ『いつもの』、よろしくね♪」

「ワウン！ワウン！」

「「「???」」」

「遥は半蔵を抱き上げて家に入る、三人は頭に『?』を浮かべる。」

「遥と半蔵が何をするつもりか気になった三人は庭の方にそっと忍び込み、窓から家の中を覗く…すると…。」

「さあ…来て…♪」

—…なんと、何を思ったか…遙はいきなり真っ裸になり、全身にバターを塗りつけ、恍惚の表情を浮かべて半蔵を誘うのであった。

「ウォン！ペチャ…ペチャ…。」

「ああん！そ…そう、そこ…そこをもっと…やああああん！！／
／半蔵！半蔵オオオオオ！！／／ふあああああッ！！」

—やがてバターの臭いに反応して飛びついた半蔵が遙のあんなところやこんなところに塗られたバターを舌でペロペロ舐め取りはじめ、遙は舐められた感触に身悶えしながら顔を赤らめ、嬌声を上げるのだった…。

「」

「」

「」

—あまりのブツ飛んだ光景を前に三人は化石の様に固まった…ちなみに刺激が強過ぎたか？ツバメは鼻血を垂らして失神してしまっている。

「…何、勝手に人シ家の飼犬で卑猥なことやらかしてんじゃ!!
ゴルァアアアアアアア!」

「ひでぶツ!!」

一近所一の美人、否、ド変態女・遙のともでもない痴態と性癖に怒り心頭…我慢ならずに統刃と刃月は窓ガラスをブチ破って乱入して蹴りをかまし、彼女のアホ全開な行動を全力阻止した。

「全く…とんでもない雌豚だな!!」

「今度やってるの見たらタダじゃおかないからねツ!」

「あれ? また半蔵がいらないぞ???」

「「何イツ!」」

一自分達の愛犬で変態プレイに興じてた遙に吐き捨てる様に忠告する統刃と刃月、そしてようやく起き上がったツバメはまた半蔵がいなくなったことに気づいたので、三兄弟は慌てて探しにいくのだった。

一午後15時。

「…見つかったか?」

「こっちはいないよ、兄ちゃん。」

「あっちはどうだった?」

一街のあちこちを探すも半蔵が全く見つからない：

「オレ、信じてる：半蔵は変態プレイに利用されてはいても人様の犬を孕ますなんて決してするわけないんだ：！！」

「ツバメ：そうだな、例え変態プレイに利用されてもそんなことはしない、我が家にそんな犯罪犬はいないハズだ。」

「：本当に信じてるのだらーか？」

「ツバメと続刃が半蔵に対する家族と愛犬の絆（？）を信じたい気持ちを含め、刃月から怪しまれてたその時、近場の公園にて：。」

「あ！ハンゾーちゃんだー！！こんにちワン♪」

「ワン♪」

「ガフウ！ヘッヘッ：。」

「近くの小学校に通う幼女・勾坂沙耶こうさか・サヤ（9）とそのペット・ジョセフィーヌちゃん（♂）とお散歩中、半蔵とバッタリ出会い、可愛い挨拶をしながら駆け寄る。」

（やっと見つけたぞ、ふむ：今度は友達らしき犬とその飼い主か、まあさっきの変態女よりはマシか：。）

（犬友もいるんだな、飼い主ながら全然解んなかったぜ。）

（はう！？あの娘、スッゴイ可愛いわ／／／『こんにちワン♪』ですって！！）

（（え？））

一半蔵が見つかりホツとする一同…しかし、沙耶を見た刃月が途端に顔を蕩けさせてニターと笑い、何やら危ない性癖に目覚めようとしてたので統刃とツバメはショックを受ける、変態女は二人もいらん。

—そして三兄弟が陰ながら幼女と犬二匹を見守って10分弱…。

「あれ？いつの間にかまたいなくなったぞ？それにあの娘の犬までいない…。」

「「なぬ!？」」

—気づけばまた半蔵が消えた…しかも今度は沙耶の飼い犬・ジョセフィーヌまでいなくなってるというオマケ付き、だが、心配は杞憂だった…。

「アオン、アオン！」

「キャフウン、キャフウン!!」

「ほえ？ハンゾーちゃん？ジョセフィーヌ？そこにいるの？」

（オレ達も往くぞ。）

（合点!）

（…沙耶たん、ハア…ハア…（；、旦那））

一草むらから二匹の鳴き声が…沙耶はトテトテと可愛らしく歩きながらその草むらに向かう、深山三兄弟も沙耶に見つからない様に何故かほふく前進で着いていく…刃月が沙耶のスカートがピラピラと舞ってる度に興奮してるが気にしてはならない。

—そして…四人が見たもの、それは…。

「バウワウ！ウォオオオオオオオン！！」

「オウオウオウオウオウオウオウオウオウオウオウオウオウ
…。」

「」

「」

「」

「」

一半蔵がジョセフィーヌの尻穴に自分の『ダックスフント』を入れて腰をカクカク振り、文字通りのけだものみたいな嬌声を上げなが

らズッコンバツコンとヤツていたという衝撃のケツ末だった…四人は化石の様に固まった。

—しかも二匹は♂同士…所謂、ホモ○ックスというヤツだった。

「…嫌アアアアアアアアアアア!? やめてエエエエエエエ!! 私
のジョセフィーヌ・フォン・ダラビツチャ・ビツケバツクハツク・
アンドロメダ・ビスタコビツチ・オナラププー・13世に酷いこ
としないでエエエエエエ!!」

「「名前長ッ!? しかも一番後ろあたりが酷過ぎる!!」」

—当然飼主でしかも少女である沙耶には二匹…半蔵とジョセフィーヌ・フォン・ダラビツチャ・ビツケバツクハツク・アンドロメダ・ビスタコビツチ・オナラププー・13世が何をヤツてるか理解出来ずに怯えて泣き出した…そして三兄弟は実はアホみたいに長い名前だったジョセフィーヌ・フォン・ダラビツチャ・ビツケバツクハツク・アンドロメダ・ビスタコビツチ・オナラププー・13世にツッコミを入れた。

「バウ!? アオーン!!」

「きゃ!? や…やだあ!! ダメ、脱がさないでエエエエエエ!!」

—半蔵はようやく沙耶の存在に気づき、ジョセフィーヌ（以下略）とのホモ○ックスを中断して沙耶の服やスカートを無理矢理破いてあつという間に白いおパンツ様一丁にひん剥いてしまい、沙耶を犯そうとした…要は穴さえあれば何でもいという犬なのに猿みたいな最低犬だったのだ、だがそうはいかない。

「やっぱりアンナ孕ましたのはテメェだったのかアアアアア!!?」

「馬鹿! 大馬鹿! 宇宙馬鹿アアアアアア!」

「ギャオオオオオン!!」

一幼女のピンチにツバメと続刃が乱入し、我が家の馬鹿犬をどこからか出した木刀でシバき上げた。

「大丈夫? 怪我は無い? お姉ちゃんがいるからもう大丈夫だよ、沙耶たん: ハア: ハア: (; 'Д、)」

「うえええん: 怖かったよ: 。」

一刃月は刃月で沙耶を抱きしめて介抱する振りをしながら尻を触りまくっていた: 完全に変態女に成り下がってる。

「ヤバい: ヤバいぜ、兄ちゃん: マジでアンナの子供引き取らないと: 。」

「落ち着け、弟よ: まずはこの駄犬を保健所に: 。」

一半蔵を半殺しにしながら彼の処遇を考えてた時: 。

「なんだ: さっき声が: ? お、お嬢様! ?」

「ふええええん!! 神嶋さーん!!」

(((YAKUZA! ?)))

「なんと、黒いスーツにグラサンといった如何にもヤクザ風の男が現れた…沙耶とは知り合いだったらしく、彼女はパタパタと走りながら神嶋という名のヤクザに駆け寄って鳴咽を漏らす…ちなみに三人は神嶋の登場に全身の血の気が引いた。」

「…って…お嬢様アアアアアアアア!? ナニがあったんですかアアアアア!」

「神嶋が驚愕するのも無理は無かった…沙耶の格好はパンツ一丁、乱暴に破かれた服やスカートが地面に散乱してる。」

「…おい、その奴ら。」

「「「ギクッ!?」」」

「神嶋は逃げようとした深山三兄弟の後ろ姿を見つけ、ある結論に至る…それは…。」

「このド外道がアアアア! よくも『関東銅磨組』の…組長のお嬢様に手エ出しやがったなアアア!? 今すぐブチ殺したらアアアア!」

「「「ギアアアアアアア!?」」」

「神嶋はブチ切れ、懷から拳銃^{ハジキ}を出して、沙耶にけしからんことをやらかしたと誤解してながら三人に向かって発砲…三人は半蔵を回収して情けない悲鳴を上げながら逃げ出す。」

「死にさらせー!!」

「半蔵の…半蔵のせいで…！」

「助けてー！！人殺しィーッ！！」

「もう嫌アアアア！！」

一血走った眼に鬼の様な形相で発砲しまくる神嶋から逃げる三兄弟
十馬鹿犬…こうして命懸けの鬼ごっこが始まってしまった…。

一その頃、大空家では…。

「う…うーん…／＼／＼このビキニは派手かな…？こっちの水着は学
校のだし、あっちは子供っぽいし…／＼／＼うう…なんか恥ずかしい
よう…／＼／＼」

「「キャンキャン！！」」

一…モーラの父親が半蔵ではないと証明された場合を考えて、街中
での水着で買い物する際の水着選びをしながら顔を赤らめ、悩んで
いるカケル…彼女の周りでは飼主の悩みなど知らずに二匹の犬、
母・アンナと子・モーラが無邪気にじゃれついていたという…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4027t/>

ワンダフル！

2011年6月27日08時02分発行